

個性ある学士課程教育の創造

学生が身につけなければならない力とは何か

2008年度

# 第14回 FD フォーラム

■ 会期

2009年 2月28日[土]・3月1日[日]

■ 会場

龍谷大学 深草学舎3号館・21号館

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

# 14th

# Faculty Development Forum

主催/財団法人大学コンソーシアム京都

後援/文部科学省、京都府、京都市

# 14th Faculty Development Forum

## 第14回FDフォーラム

### 学生が身につけるべき力とは何か

#### — 個性ある学士課程教育の創造 —

2月28日(土) シンポジウム 13:10—17:00

### 「学生が身につけるべき力とは何か」

— 個性ある学士課程教育の創造 —

コーディネーター 木野 茂氏 (立命館大学 共通教育推進機構 教授)

シンポジスト 結城 章夫氏 (山形大学 学長)

シンポジスト 石川 憲一氏 (金沢工業大学 学長)

シンポジスト 田中 每実氏 (京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授(センター長))

社会環境・情勢が急変する背景の中、高等教育においても「グローバル化」「ユニバーサル化」の波がおしよせているが、最近では教育の質保証や学生が身につけるべき力が問われている。中央教育審議会で審議された「学士力」もその一つの指針であるが、本来は各大学の理念に沿った個性ある学士課程教育の創造という観点から見たとき、学生が身につけるべき力とは各大学の個性に応じて追求されなければならない。

このシンポジウムでは、そのような意味で個性ある先進的な取り組みを続けている二大学からの報告を受けたうえで、学生が身につけるべき力について様々な角度・観点から語っていただき、参加者とともに議論を深めたい。

■ ご注意

シンポジウムは、2つの会場を使用致します。龍谷大学深草学舎3号館の301教室を第1会場とし、2階201・202教室を第2会場とします。第1会場の模様を第2会場モニターを通じて視聴頂けます。

1日目:2月28日(土)

Time Schedule

2日目:3月1日(日)

受付開始 12:00~

開会挨拶 13:00~13:10

- 会場校挨拶  
若原 道昭氏  
(龍谷大学 学長)
- 運営責任者挨拶  
松本 和一郎氏  
(龍谷大学 理工学部数理情報学科 教授  
大学教育開発センター長)

シンポジウム (前半) 13:10~14:50

学生が身につけるべき力とは何か  
— 個性ある学士課程教育の創造 —

休憩 14:50~15:20

シンポジウム (後半) 15:20~17:00

学生が身につけるべき力とは何か  
— 個性ある学士課程教育の創造 —

情報交流会 17:15~19:00

9:30 受付開始 9:30~

分科会(午前の部) 10:00~12:00

- 第1ミニ・シンポジウム ● 第2ミニ・シンポジウム
- 第3ミニ・シンポジウム ● 第4ミニ・シンポジウム
- 第1分科会 ● 第2分科会 ● 第3分科会
- 第4分科会 ● 第5分科会 ● 第6分科会
- 第7分科会 ● 第8分科会

休憩 12:00~13:00

分科会(午後の部) 13:00~15:00

- 第1ミニ・シンポジウム ● 第2ミニ・シンポジウム
- 第3ミニ・シンポジウム ● 第4ミニ・シンポジウム
- 第1分科会 ● 第2分科会 ● 第3分科会
- 第4分科会 ● 第5分科会 ● 第6分科会
- 第7分科会 ● 第8分科会

第1ミニ・シンポジウム

地域連携型教育から何が学べるか

大学の存在意義は、教育によって人材を育成することと学問研究を通して社会に貢献することにあるが、大学は一方向的に社会に貢献するだけでなく、社会の側からの刺激や協力を得ることによって、教育と研究それぞれの発展・深化の可能性を拓けることができる。このような観点から、近年、地元地域社会との連携を試みる大学が全国各地で見られるようになってきた。本ミニ・シンポジウムでは、昨年度に引き続き、地域社会との連携を活用した教育プログラムを実施している大学を招き、それぞれのプログラムの概要・特徴などを紹介して頂く。その上で、地域連携型教育の在り方についてフロア参加者をも交えた意見交換を展開したい。

- コーディネーター 三浦 潔氏(京都文教大学 人間学部現代社会学科 教授)  
 報告者 森 正美氏(京都文教大学 人間学部文化人類学科 准教授)  
 金澤 誠一氏(佛教大学 社会学部公共政策学科 教授  
 コミュニティ キャンパス長)  
 鯉江 康正氏(長岡大学 経済経営学部環境経済学科 教授)

第2ミニ・シンポジウム

教職協働 — 教員と職員との協働(Co-work)作り—

2008年3月に発表された「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」では、改革推進の具体策として、組織的な教育活動を支える「教職員の職能開発」が取り上げられています。教員の教育力向上に任せるだけでなく、職員が専門性を向上させて教育・経営面に積極的に参画する。こうした職員と教員との協働—コワーカー—の一層の強化が、各大学に求められています。では、どのようにすれば、協働が実りあるものに成るのでしょうか。今回は、このテーマを検討するため、私立・国立、教員・職員、多様な考え方が出会う場になりました。職員と教員のコワークには、真似をすればよいといったモデルは、無いのかもしれませんが。とはいえ、教員と職員との関係が組織的な教育活動に与える影響の大きさを念頭に置いて、「教職協働」の理念や具体策を展開したいと考えています。なお、本ミニ・シンポでの検討を深めるために、コーディネーターと発表者の5人がWebを活用し、ブログにて話題提供と情報発信を事前に行ってまいります。(URL: <http://coworkingtom.blogspot.com/>)

- コーディネーター 高橋 伸一氏(京都精華大学 人文学部 教授 教務部長)  
 報告者 三浦 真琴氏(関西大学 学事局 教務センター 特別顧問)  
 田中 岳氏(九州大学 教育改革企画支援室 准教授)  
 神保 啓子氏(名城大学 大学教育開発センター 主査)  
 樋口 浩朗氏(山形大学 企画部経営企画ユニット 企画・評価チーム[企画担当])

第1分科会

1単位45時間の学習の実質化の光と陰

「学士力の保証」というキーワードが注目される今日、法で定められた「1単位あたり45時間の学習」の実現が注目を浴びています。「45時間」のうち、15時間は教室での指導、30時間が教室外での自学となっています。しかし、現実には多くの大学で、この両方とも実現されていないのではないのでしょうか? 「学士力の保証」という言葉が最近、社会から強く要請されるようになった背景と言葉の意味する所を解説して頂きます。○半期の授業日を15日確保する試みは、いくつかの大学で既に実現され、多くの大学で検討中ですが、検討中の大学から「15日間確保のしわ寄せがきついな」との声が聞こえてきています。「教育の質の向上」と「教育以外の研究・労働環境などの改善」を両立させる観点から、既に「15日確保」を行っている大学からの事例報告と課題を報告していただきます。○学生による自学30時間の確保は「30時間」という数字にこだわると、下級生においては、実現不可能な総時間数になります。しかし、学生の自学は教育における最も重要な要素です。「自学の充実」という観点から、この課題に取り組んでいる大学からの報告をいただきます。○以上を踏まえてグループ討議をします。参加者全員に、所属大学・学部・学科の現状報告と展望をお聞かせしますから、学部・全学レベルの動向もあらかじめ調べてきて下さい。

- コーディネーター 松本 和一郎氏(龍谷大学 理工学部数理情報学 教授 大学教育開発センター長)  
 報告者 安岡 高志氏(立命館大学 教育開発推進機構 教授)  
 宮本 孝三氏(帝塚山大学 学生支援センター 部長)  
 植田 正暢氏(福岡女学院大学 短期大学部 英語科 准教授)  
 林 久夫氏(龍谷大学 理工学部 教授 教務主任)

第2分科会

学生とともに進めるFD

FDは大学の組織的な教育改善の取り組みの総称である。そのFDを担うのは当然教員が主であることに変わりはないが、最近は職員もSDの一環として大きな役割を担いつつある。しかし、大学の重要な構成員であり、授業を受ける当事者である学生もFDの主体と言えるのではなからうか。このような発想からFDに参加する学生の取り組みを始めている二つの大学から報告を受けた後、教職員と学生が一緒になった小グループ(各10名)に分かれて「学生とともに進めるFDとしてどんなことが考えられるか」のグループディスカッションを行う。各グループからの報告の後、指定討論者からの問題提起をもとに参加者で話し合う。定員は、教職員、学生、それぞれ25人となります。

- コーディネーター 木野 茂氏(立命館大学 共通教育推進機構 教授)  
 報告者 山内 源氏(岡山大学 教育開発センター職員)  
 岡山大学 学生2名(学生・教職員教育改善委員)  
 和田 陽子氏(立命館大学 教育開発推進機構職員)  
 立命館大学 学生2名(学生FDスタッフ)  
 指定討論者 橋本 勝氏(岡山大学 教育開発センター 教授)

第5分科会

大学での学びの質を高めるために

高大連携は、中央教育審議会答申直後の「高校における大学の授業の実施」や「高校生が大学の授業を受講する機会の提供」といった段階から、高校と大学の接続を視野に入れた大学の教育改善につながる新段階が開始されている。たとえば、早期入学決定者への入学前教育や、リメディアル教育などの実践がそれである。このことは、専門分野に関心の高い学生の育成や、現在言われている学力低下問題の解消へ向けた一つの策になり得るといえ、大学が社会へ人材を送り出すための「学力保障」を実現するための基盤作りとなりうる。

本分科会では、高大連携をめぐる現状と課題について豊富な資料をもとにその概要と問題の焦点化を図った上で、高校との連携事業を大学のキャリア教育につなげていった事例や高校・大学との双方向性の学びを組織的に実践したフィールドワークの事例から、大学における学びの質を高めるための高校教育への積極的なアプローチや大学の教育改革につなげていく高大連携の新しいあり方を模索してみたい。

- コーディネーター 榎原 典子氏(京都教育大学 教育学部 教授)  
 報告者 椋本 洋氏(立命館大学 教育開発推進機構 教授)  
 椋本 洋氏(立命館大学 教育開発推進機構 教授)  
 上田 健作氏(高知大学 人文学部 教授、総合教育センター 大学教育創造部門高大連携部会長兼務)  
 関目 六左衛門氏(京都市立西京高校 校長)  
 本林 靖久氏(大谷大学 講師)

第6分科会

主体的な「学び」を目指した学習支援 —「グループ学習」と「プロジェクト学習」の方法と実践—

本分科会においては、学生が主体的な「学び」の姿勢を身につける効果的な学習方法として、「グループ学習」及び「プロジェクト学習」に焦点をあてるものである。「グループ学習」はLTD話し合い学習法等多様な方法が開発されており、「プロジェクト学習」は実践的な能力養成を主眼とした学生の自律的な活動を促す方法として注目を集めている。両方法に基づいた3つの実践事例の報告をもとに、学生の主体的な「学び」の姿勢をいかに導きだすかを考えるのが本分科会の目的である。報告及び議論を通じて、参加者一人一人が日常の活動に参考となる分科会を目指していく。

- コーディネーター 國安 俊彦氏(京都外国語大学・短期大学キャリア英語科 准教授)  
 報告者 安永 悟氏(久留米大学 文学部教授、大学院心理学研究科 科長)  
 八重樫 文氏(立命館大学 経営学部 環境・デザインインスティテュート 准教授)  
 杉原 真晃氏(山形大学 高等教育研究企画センター 講師)

第3ミニ・シンポジウム

キャリア教育の実践と今後のあり方  
—学士課程教育の構築を求める動きの中で—

今回のFDフォーラムのキーワードの一つである「学士課程教育」は今そのあり方が大きく問われている。専門教育や資格取得に過度の力点を置き、就職につながるかどうかという点のみを重視するような教育活動が、学士課程教育の一部として位置づけられるのはふさわしいことなのか、といった疑問が投げかけられ始めているように、学士課程教育の構築・定義を求める動きが活発になってきた。このような動きが見られる中、大学のキャリア教育のあり方も大きな転換を迫られていると言えよう。本ミニ・シンポジウムでは、高い評価を受けているキャリア教育の実践事例の紹介や、学士課程教育の構築を求める動きの中でのキャリア教育の方向性といったトピックを報告者に提供して頂く。実際の運営を経て見えてきた改善すべき点、障壁となる問題点なども浮き彫りにし、今後のキャリア教育のあり方をフロアの参加者と共に考えていきたい。

- コーディネーター 金谷 益道氏(同志社大学 文学部英文学科 准教授)  
報告者 川崎 友嗣氏(関西大学 社会学部 教授)  
伊藤 文男氏(武蔵野大学 学生支援部 キャリア開発課長)  
明比 卓氏(神奈川大学 学修進路支援部 就職事務部長)

第4ミニ・シンポジウム

大学教育におけるeラーニングシステムの可能性

学士課程教育の質保証、質的向上が求められているが、eラーニングがそれにとどのような役割を果たしうるのであるのか、大学教育におけるeラーニングシステムの可能性について集中的に検討することが、当シンポジウムの狙いである。eラーニングは、物理的な時空に制約されないことから、その活用可能性が期待されてきたが、コンテンツ制作、人的サポート等に関わるeラーニング固有の克服すべき問題点もあって、その大幅な普及を制約してきた。しかし、既に多くの大学で導入されている学習支援システム(LMS)の活用により、eラーニングは正規科目教育のみならず、高大接続授業や入学前教育、また大学間連携教育や生涯教育を含めて可能性が開かれているはずである。eラーニングの抱える困難の克服と可能性を議論したい。

- コーディネーター 河野 勝彦氏(京都産業大学 副学長 教育エクセレンス支援センター長)  
報告者 坪内 伸夫氏(京都産業大学 情報センター 課長)  
穂屋下 茂氏(佐賀大学 高等教育開発センター 教授)  
加藤 幸雄氏(日本福祉大学 副学長)

第3分科会

未来を担うブレFDの創造  
—大学院生大学教員準備研修のあり方と課題

高等教育全般にわたって、FDが本格的に義務化されるなかで、研究大学院を中心に、大学院生を対象とした大学教員準備研修(ブレFD)が、全国で注目され始めている。まず、ブレFDの数年にわたる経験をもつ広島大学・名古屋大学・京都大学の3大学から、それがどのように進められ、どのような課題があるのかについて情報提供いただく。それを踏まえて、今後の大学教育・FD活動において、ブレFDがどのように位置づけられていくのかを見据えつつ、どのようなブレFDが望まれるのか、そのために解決すべき課題は何かといった点について、ブレFDを実施する研究大学院のみならず、大学教員を受け入れる大学の視点をも含めて多角的に議論を深めていきたい。

- コーディネーター 大塚 雄作氏(京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授)  
報告者 夏目 達也氏(名古屋大学 高等教育研究センター 教授)  
松下 佳代氏(京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授)  
福留 東土氏(広島大学 高等教育研究開発センター 准教授)  
指定討論者 小笠原 正明氏(筑波大学 特任教授)

第4分科会

教養・文化教育としての外国語教育

外国語教育は、外国語の文法規則とその運用技法を教えるだけではなく、その外国語に基づき形成された教養・文化を教えることでもある。この二領域の教育は、本来表裏一体を成すものと言えよう。しかし、現在の初修外国語教育は、外国語大学の専攻課程を除き、授業時間数の減少等により、多くの場合、初歩的な文法と読本・会話の授業を通して、その外国語文化圏の教養・文化の特徴を伝えることで、学生たちに母語の特徴と異文化の理解を促進することに主眼が置かれている。この現状に甘んずることなく、大学教育の基盤を成す教養教育の活性化を目指す「教養・文化教育としての外国語教育」について、別の積極的な方途も含めて、議論してみたい。

- コーディネーター 秋澤 雅男氏(京都薬科大学 一般教育 准教授)  
野田 四郎氏(京都ノートルダム女子大学 人間文化学科 教授)  
報告者 山取 清氏(近畿大学 語学教育部 教授)(ドイツ語)  
清原 文代氏(大阪府立大学 総合教育研究機構 准教授)(中国語)  
西山 教行氏(京都大学 大学院人間・環境学研究所 准教授)(フランス語)  
山本 純一氏(慶應義塾大学 環境情報学部 教授)(スペイン語)  
寺田 裕子氏(慶應義塾大学 総合政策学部 訪問講師)(スペイン語)

第7分科会

高等教育におけるオルタナティブとしての短期大学

学士課程教育のあり方が問われる今日にあって、学士の半分の期間で修了する短期大学教育には、どのような可能性や課題があるのだろうか。「全入時代」における入学者人口の先細りを念頭に置いた4年制大学化や共学化といった短大組織そのものを改編していく流れが一方にあり、また他方では、編入学に特化したプログラム作りや資格取得を強調した学生募集、学生数が比較的少人数であるからこそ可能になるきめ細やかな教育、といった短期大学ならではの特性を強調する流れがある。本分科会では、実際に行われている短期大学教育の見直しや新しい取り組みを紹介し、高等教育を受ける際の可能的・実践的な選択肢としての短期大学教育をどのように作りあげていくかについて、参加者と共に議論していく。

- コーディネーター 藤枝 真氏(大谷大学 文学部 講師)  
報告者 野上 憲男氏(京都経済短期大学 学長)  
小林 一彦氏(京都産業大学 文化学部 教授)  
塚本 泰造氏(宮崎学園短期大学 人間文化学科 准教授  
FD推進委員会 委員長)  
阪口 春彦氏(龍谷大学 短期大学部 社会福祉科 教授)

第8分科会

初年次教育の展望と課題

初年次教育に取り組み、定着を図ることが求められている。初年次学生の資質や能力の傾向が従来とは異なってきたからである。このことは、「授業を運営していくにあたって、教員の教授法をどのように改善するか」という問題とは別の問題である。「学生の学習づくりを目的とするのか・学生の仲間づくりを目的とするのか」「全学的に共通する取り組みとするのか・学部学科の特性に準じた取り組みとするのか」「どの科目において行うのか・複数の科目群として行うのか」「市販テキストを用いるのか・自学開発教材を用いるのか」など、要検討のことから少なくない。本分科会では、初年次教育を導入している大学、あるいは導入を検討している大学に共通する問題点について事例を通して考察を図りたい。

- コーディネーター 松本 真治氏(佛教大学 文学部英米学科 准教授)  
報告者 谷本 啓氏(同志社大学 商学部商学科 准教授)  
佐藤 広志氏(関西国際大学 高等教育研究開発センター  
初年次教育部門長)  
湯地 宏樹氏(比治山大学 短期大学部 准教授)

# Faculty Development Forum

## 学生が身につけるべき力とは何か

—— 個性ある学士課程教育の創造 ——

### 第14回 FDフォーラム 申込要項

#### 申込 期日

**2009年2月1日(日)**

※当日の参加申し込みは、会場の混み具合によって受付をお断りすることがあります。  
※龍谷大学には駐車できません。公共交通機関をご利用いただき、ご来場願います。

#### 申込 方法

申し込みは下記のURLの「参加申込フォーム」にてお願いします。お申し込みいただいた方には、2月上旬をめどに「参加証」をお送りしますので、当日必ずご持参下さい。  
参加費につきましては当日会場にて徴収(領収書発行)させていただきます。

**URL** <http://www.consortium.or.jp/link/fd14.html>

#### 参加 費用

参加費区分	情報交換会含む	情報交換会除く
加盟大学・短期大学教職員	5,000円	3,000円
非加盟大学・短期大学教職員、一般	7,000円	5,000円
加盟大学・短期大学の学生	1,000円	無料
非加盟大学・短期大学の学生	2,000円	1,000円

### 第14回 FDフォーラム企画検討委員会委員

委員長	松本和一郎	〈龍谷大学 理工学部数理情報学科 教授 大学教育開発センター長〉
副委員長	木野 茂	〈立命館大学 共通教育推進機構 教授〉
委員	三浦 潔	〈京都文教大学 人間学部現代社会学科 教授〉
	高橋 伸一	〈京都精華大学 人文学部教授 教務部長〉
	金谷 益道	〈同志社大学 文学部英文学科 准教授〉
	河原地英武	〈京都産業大学 教授 教育エクセレンス支援センター 副センター長〉
	大塚 雄作	〈京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授〉
	秋澤 雅男	〈京都薬科大学 一般教育 准教授〉
	野田 四郎	〈京都ノートルダム女子大学 人間文化学科 教授〉
	榊原 典子	〈京都教育大学 教育学部 教授〉
	國安 俊彦	〈京都外国語大学・短期大学キャリア英語科 准教授〉
	藤枝 真	〈大谷大学 文学部 講師〉
	達富 洋二	〈佛教大学 教育学部教育学科 准教授・教授法開発室 室長〉

## 会場案内

龍谷大学 深草キャンパス

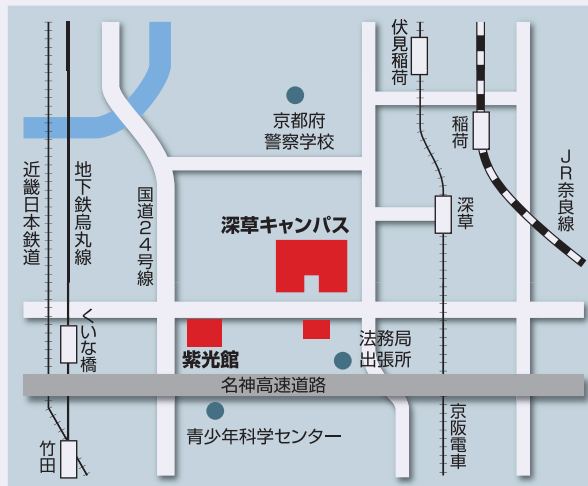
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67



- |        |        |
|--------|--------|
| ① 1号館  | ⑪ 紫陽館  |
| ② 2号館  | ⑫ 体育館  |
| ③ 3号館  | ⑬ 21号館 |
| ④ 4号館  | ⑭ 紫光館  |
| ⑤ 5号館  | ⑮ 至心館  |
| ⑥ 紫英館  | ⑯ 西門   |
| ⑦ 図書館  | ⑰ 正門   |
| ⑧ 顕真館  | ⑱ 通用門  |
| ⑨ 学友会館 | ⑲ 東門   |
| ⑩ 紫明館  | ⑳ 北門   |

### 交通のアクセス

- 地下鉄「京都駅」から竹田方面へ「くいな橋駅」下車、東へ徒歩約10分
- JR「京都駅」から奈良方面へ「稲荷駅」下車、東西へ徒歩約8分
- 京阪「四條駅」から淀屋橋方面へ「深草駅」下車、西へ徒歩約3分



### お問い合わせ



財団 大学コンソーシアム 京都  
法人 The Consortium of Universities in Kyoto

#### FDフォーラム担当

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下ル  
キャンパスプラザ京都

[fd-14@consortium.or.jp](mailto:fd-14@consortium.or.jp)

TEL 075-353-9100

FAX 075-353-9101 ※(日・月を除く9:00~17:00)